

プロニスワフ・ピウスツキ年譜

井上紘一作成

波蘭の志士プロニラウ、ビルストスキー氏なる人あり、郷里ウキルナ市の中學校を卒へて聖彼得堡の法科大學に入り修學中、露國革命派と意氣相投じ、資を擲て其舉を助け、遂に露國警察の探知する所と爲りて捕はれたるは十九歳の時なりしが、樺太北部の寒村に流謫せられて、居ること十二年、土人ギリヤク及びアイヌと交わりて能く其言語風俗に精通し、ギリヤク考を草して露國地學協會記事に掲載されたり、後西伯利大陸に轉任するを許され、浦鹽斯德に移り地學協會博物館管理の任に當り、傍ら新聞事業に従事中、露國大學院設置の亜細亞研究會より樺太南部在住「アイヌ」の實地調査を託され、樺太南部に渡りてアイヌの事情を調査研究すること三年有半、其間我が北海道アイヌの事情をも調査せんとして、同道に渡航したること二回、日露開戦の危機に迫りて去りたりしが、戦後より本邦に渡來し、東京に滞在すること五箇月、普く知名の人類學士に就きて研究を遂げ、去月二十四日を以て歸國の途に就きたり……。

「露國ビルストスキー氏寄稿「樺太アイヌの状態」(上)——『世界』二十六號所収、東京…京華日報社、明治三十九(一九〇六)年六月十日発行——所載の「編者序」(57頁)より抜粋引用した。「プロニラウ、ビルストスキー」はプロニスワフ・ピウスツキを指しており、同記事は彼のアイヌ関係処女作である。原文はロシア語。邦訳者は上田將であることが判明している。「編者序」はあるいは訳者による「著者紹介」か。いずれにせよ、ピウスツキ本人が記したメモか口頭で述べた略歴を、上田が邦訳した文章であろう。一九〇六年六月には頗る正確なピウスツキの略歴が邦文で公表されていたわけである。但し、末尾の「去月二十四日を以て歸國の途に就きたり」との記載だけは正確でない。ピウスツキが帰國の途に就いたのは、後述のように一九〇六年八月三日である。

一八六六

グレゴリウス暦十一月二日（ユリウス旧露暦では十月二十一日）、ロシア帝国ヴィルノ県にある母の相続領地ズーウフ（現ザラヴァス）にて出生。ユゼフ・ピョートル・ピウスツキ（1833～1902）と、ビレーヴィチ家出身のマリア・ピウスツカ（1862～1884）の第三子で長男、ピウスツキ家の嫡嗣。両家ともリトワニアでは由緒正しい貴族の家柄であった。

一八七五

七月四日、「ズーウフ」の大火で屋敷がほぼ全焼。県都ヴィルノ（現リトワニア共和国首都ヴィルニウス）へ一家を挙げて移住する。

一八七七

九月、年子の弟ユゼフ（のちの再興ポーランド共和国初代元帥）とともに、ヴィルノ第一ギムナジヤに入学。

一八八二

春、次々弟のアダムを入れたピウスツキ三兄弟は、同世代の若者らと語らって自主教育サークル「スペインヤ」を組織した。最初の非合法活動に従事する。

一八八三

六月十四日、六年次の学年末試験に失敗し、落第が宣告される。

七月十日、新設されたヴィルノ第二ギムナジヤへの転校を強いられる。

十一月四日、母マリアの手術が執行されて、深く落ち込む。

この頃、バニェヴィチ家の娘ゾフィアに恋をする。初恋であった。

一八八四

三月三日、ゾフィア・バニェヴィチの許でピアノのレッスンを受ける。恋語らいの間、就寝中の母親を騙すべく、妹のマリアがピアノを弾きつづけた。

春、双子の幼い末子（第十一、十二子）が風邪をこじらせて亡くなる。

九月一日（露暦八月二十日）、母マリア・ピウスツカが永眠する。享年四十二。

一八八五

四月末、ゾフィア・バニェヴィチは、母親の差し金でペテルブルグへ遣られ、鉄道関係事務所に就職。

八月三日、追試を経て七年次を無事修了するも、ヴィルノ第二ギムナジヤを退学。

八月十九日、ゾフィアを追って帝都サンクト・ペテルブルグに到着。翌二十日には彼女と再会するも、二人の仲は母親によって引き裂かれた。その後、傷心のプロニスワフを慰めたのが、母親とともに上京した年子の妹マリア・バニェヴィチであるが、その詳細は詳らかでない。

八月二十七日、ペテルブルグ第五ギムナジヤの八年次編入学。

一八八六

六月、同ギムナジヤ卒業。七月二十九日、サンクト・ペテルブルグ帝国大学法学部入学手続きを済ませる。

十二月末、クリスマス休暇をヴィルノで過ごすため帰省する。プロニスワフにとっては「最後の帰郷」だった。

一八八七

二月一日、休暇を終えてペテルブルグに戻る。

三月三日、ペテルブルグ市内で二月一日に起きたロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件の容疑者として拘束され、ペトロパヴロフスク要塞の独房に収容される。

四月十五〜十九日、元老院に特設された法廷で審理が実施されて、プロニスワフを含む全被告15名に死刑宣告。

四月二十三日、皇帝の特赦により、プロニスワフは懲役十五年とサハリン流刑に減刑された。

五月八日、レーニンの兄アレクサンドル・ウリヤノフら5名の死刑囚に対し、シュリッセルブルグ要塞で絞首刑が執行された。

五月二十七日、父ユゼフが遠くから見守る中で、プロニスワフを乗せた護送列車はペテルブルグを出発、これが父子の「今生の別れ」となる。護送列車は、モスクワを経由して六月六日、オデッサに到着した。

六月九日、ロシア義勇艦隊社の「ニージニー・ノヴゴロド」号は、525名の既決囚を積載してオデッサ出港。

八月三日、同号はスエズ運河、コロンボ、シンガポール、長崎、ウラヂヴオストク（浦塩）を経由して、この日に北サハ

リン西海岸のアレクサンドロフスク哨所（現アレクサンドロフスク・サハリンスキー）に入港。

八月九日、十二日、ティモフスク管区ルイコフスコエ村（現キーロフスコエ）の監獄まで徒歩で護送される。

八月、十二月、懲役囚に科される通常作業に従事する。加えて、役人や流刑入植囚の子弟の家庭教師も務めだし、近在のギリヤーク（現ニヴフ）たちとの交流が始まる。

一八八九

ティモフスク管区警察署事務所で勤務開始。

一八九一

一月、ルイコフスコエ村を訪ねたリエフ・シユテルンベルグと出会い、友情は終生維持された。これを機にシユテルンベルグと協力してニヴフ研究を推進する。

一八九三

七月、ルイコフスコエ測候所での勤務開始。

一八九六

五月十七日、父ユゼフの嘆願書が功を奏し、五月十四日付皇帝戴冠特赦令が適用されて、刑期の「3分の1」が減免される。父親は九二年四月、九四年十一月にも同様な嘆願書を提出したが徒労に終わっていた。

七月、八月、コルサコフスク管区（日本統治下の「南樺太」にほぼ該当）へ派遣されて、コルサコフスク哨所（大泊）、シヤンツイ（落合）で測候所の設営に従事した。アイヌの人たちと初めて出会う。

一八九七

二月二十七日、軽減された刑期の十年が満了し、強制労働から解放されて、ティモフスク管区ルイコフスコエ村に流刑入植囚として登録された。

五月二十三日、ロシア帝室地理協会プリアムール支部傘下のアムール地方研究会（以下ではOIAKと略記）は、同研究会附設博物館にプロニスワフを採用するべく、居住地のウラヂヴォストク移転を求める請願書提出。しかし事態が紛糾して、中々結着しなかった。

九月〜十二月、アレクサンドロフスク哨所にて、サハリン島医務局主任L・V・ポドゥプスキー医師の下で文書係を務める。勤務は翌九八年四月まで継続された。

一八九八

四月二十日、民族学関係処女作「樺太ギリヤークの困窮と欲求」攔筆、論文は『ロシア帝室地理協会プリアムール支部紀要』（4巻4分冊、一八九八年、ハバロフスク刊）に掲載された。

五月〜八月、レイコフスコエ村の測候所に勤務。夏には父ユゼフが再び嘆願書を提出して、息子のウラヂヴオストク移転への高配を求めた。

十一月二十八日、プリアムール総督はプロニスワフのウラヂヴオストク居住を許可する。

十一月〜十二月、OIAK運営委員会はニヴフ民族資料の収集をプロニスワフに託し、200（十一月半ばに140、十二月末に60）ルーブリを送金した。

一八九九

二月、ウラヂヴオストクにおける一年間の在任許可証が発給された（但し、警察の監視下に置かれる）。

三月初旬（十二日頃）、ウラヂヴオストク到着、OIAK博物館の物品管理人（年俸600ルーブリ）として館内に住みこむ。

十月二十八日、パリ万博への極東地方関連出展品が、ロシア義勇艦隊社の「ヘルソン」号で搬出された。これはP・P・セミョノフ・ロシア帝室地理協会副総裁がOIAK博物館に託した事業。出展コレクションの構築はプロニスワフが担当、自らが収集したサハリン・ニヴフ資料158点も含まれていた。一九〇〇年のパリ万博ではこの極東コレクション展示が高く評価されて、国際審査員賞の銀牌がプロニスワフに授与される。

一九〇〇

この年、プロニスワフはOIAK博物館主事を務める。

三月十七日、自らの年俸を半減して、減額分では館に必須の標本製作者を雇用するよう申し出る。

一九〇一

この年、プロニスワフはOIAK博物館の司書を務め、沿海州統計委員会とも雇用契約を結ぶ。委員会書記のN・V・キ

リロフ医師に協力して、同委員会の活動にも積極的にかかわる。

二月二十三日、N・A・パリチエフスキーOIAK運営委員会副議長と連署で作家チエーホフへ、「サハリン島と極東の旅」に関する著作の寄贈を求める書簡を送る。作家からは当該著作が寄贈された。

三月十五日、OIAK準会員に選出される。

五月十七日、OIAK博物館退職が承認される。プロニスワフは衰弱した健康を養生すべく、より乾燥したブラゴヴェシチェンスクへの転地を願い出て、博物館での有給勤務も辞退することを申し出ていた。その背景には、パリチエフスキー副議長との確執があった。

夏、ニヴフ少年のインディンがサハリンからウラヂヴオストクに到着。プロニスワフは、サハリンでの教え子で最も聡明だったインディンを、学業継続のため州都に呼び寄せることに成功する。

八月二十七日、OIAK博物館は月俸50ルーブリでプロニスワフを臨時雇用する。

十月十八日、プリアムール総督からブラゴヴェシチェンスク居住が許可されたが、転地療養の着手は急がなかった。サハリン出張をめぐっては、この頃からロシア帝室科学アカデミーの打診があったからであろう。

一九〇二

二月十七日、科学アカデミー副総裁がプロニスワフへ電報を送り、民族資料収集を目的とする南サハリン出張を要請。

四月二日、父ユゼフ・ピウスツキがペテルブルグで永眠。享年六十九。

五月五日、沿海州知事はサハリン島知事へ、「ピウスツキの行動に瑕疵はなく、州政府に勤務している」と報告。

五月三十一日、プリアムール総督は、アカデミーの委嘱によるプロニスワフの南サハリン出張を許可する。

七月八日、東清（中東）鉄道会社の汽船「ゼーヤ」号でウラヂヴオストク港を発ち、樺太島へ向かった。

プロニスワフに託された任務は、アイヌとオロツコ（現ウイラタ）の民族標本とフォークロア資料の収集。彼はこのとき旅行許可証、1千ルーブリの出張費、OIAK運営委員会から託された民族標本購入の前金50ルーブリ、そしてカメラと（恐らく）エディソン式蓄音器も携えていた。また肺結核を発病したインディン少年も、故郷の島で養生させるべく帯同していたであろう。

七月十一日、コルサコフ（大泊）に到着。十三日、シヤンツイ村（落合、現ドリンスク）を訪ねる。
七月十六日～八月六日、西海岸のマウカ（眞岡、現ホルムスク）地区に滞在して、アイヌ資料の収集や人口調査に従事し、蓄音器でアイヌの歌も収録する。

八月六日、セミヨノフリデンビー商会の漁船に便乗して函館へ向かう。マウカ・コルサコフ間の便船が得られぬため、函館を経由してコルサコフへ戻ったもので、函館には3週間滞在した。その間はG・P・デンビーの屋敷に逗留して、子息や森高夫妻（メリ夫人の弟伊助とその配偶者）の案内で市内や近郊を見物する。但し、これは日露両国にとって非合法の「初来日」だった。

八月三十日、函館よりコルサコフに帰着。

九月十日から十二日までの一日、コルサコフでM・N・リヤプウノフ・サハリン島武官知事と懇談。知事はアイヌの人口調査を委託し、アイヌ子弟の識字学校へ支援金（150ルーブリ）を約束する。十三日以降はオタサン（小田寒、現フィロソヴオ）、セラロコ（白浦、現ヴズモリエ）の両村を訪ね、熊祭りに参加した（論文「権太アイヌの熊祭りにて」参照）。

十月八日、コルサコフに戻る。同日、リヤプウノフ知事の裁定でテイモフスク管区在住農民身分に編入される。シヤンツイ、マウカなどで発注してあった民族標本を梱包して、月末にオデッサへ向かうロシア義勇艦隊社の「ヤロスラヴリ」号へ引き渡し、ペテルブルグへ向けて送出。

十一月半ばから2週間、タコエ村に滞在。その後二十三日までシヤンツイ、オタサンを歴訪し、それぞれの村でアイヌ子弟のための識字学校開設に尽力する。両校はいずれも冬場に開設、前者では十八才のインディン、後者では二十七才のタロンヂ（千徳太郎治）が教師を務めた。

十一月二十四日～十二月十日、東海岸のルレ村（魯礼）を訪ねて聴取り調査に従事、「ハウキ（英雄詞曲）」を初めて採録する。

十二月十日、シヤンツイ村に戻る。

十二月十四日、アイ（相濱）村に移動、アイ・コタンのバフンケ酋長（木村愛吉）のロシア式丸太小屋に止宿して越冬。バフンケ宅はプロニスワフの定宿となる。

一九〇三

年初、ペテルブルグのシユテルンベルグから電報受領。プロニスワフの希望通り、南サハリン調査の継続を認めるとの内容で、前年に創設された「中央・東アジア研究国際協議会ロシア委員会」が以降の調査資金を提供することになった。彼は同委員会の調査助成第一号として、一九〇三年度に700ルーブリ、一九〇四年度は750ルーブリを受領する。一九〇五年度は1千ルーブリと算定されたが、調査は六月に中断されたから半額を受け取る―但し主著『アイヌの言語・フオークロア研究資料』(2012)では総額で「225英ポンド」を受領した(VIII頁)と記している。

二月一日～十五日、アイ村にてアイヌ語学習。採録したアイヌ語テキストの逐語訳も試みる。「バフンケ會長の愛姪」チユフサンマ(シンキンチョウ)との恋語らしいは、この頃に始まったであろう。

二月十五日～三月一日、ルレ村にて昔話や「ハウキ」の翻訳に従事。

二月二十八日、インデインの肺結核が重篤化して入院、シヤンツィでの授業は中断を余儀なくされた。彼は四月初めにコルサコフの病院で息を引き取る。

三月一日～四月二十三日、アイ村に腰を据えてアイヌ語学習などに励んだ。その際、チユフサンマはプロニスワフの最良のアイヌ語教師を務めたと推測される。

四月二十四日、一九〇二／三年の冬にシヤンツィ、オタサンの両村で実施した識字学校の活動報告を擱筆。この頃、前年十一月～十二月のルレ村滞在までを記載する「ロシア委員会」宛「復命報告1」(一九〇二～一九〇三年の樺太アイヌへの旅の予報)も執筆したと想定される。

四月三十日～五月十六日、アイヌの丸木舟で東海岸伝いに南下し、オブサキ(負咲)、オチヨホカ(落帆、現レスノエ)、トウナイチャ(富内、現オホーツコエ)、アイルポ(愛郎、現スボヴォドナヤ)を歴訪。トウナイチャでは山邊安之助らから「ハウキ」や「オイナ(神謡)」を採録した。

六月六日、北サハリン踏査のため多来加湾へ向かう便船を確保するべくコルサコフへ赴き、そこでW・シエロシエフスキの手紙に接する。五月五日(グレゴリウス暦で同十八日)付の手紙は「交通丸が来函したら、あなたと一緒に、たとえあなた抜きでも直ちにピラトリ(平取)へ出立する」と追記していた。四月半ば(グレゴリウス暦で五月初旬)に函館入りを果たし

ていたシエロシエフスキは、遂に痺れを切らして、この最後通牒に及んだわけである。ロシア地理協会が派遣した北海道アイヌ調査の顛末は、シエロシエフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」（井上 三三。収録）を見られたい。ところでプロニスワフの方は、直ちに北サハリン行きを中止、便船の契約を解除してナイブチ（内淵、現ウスチ・ドリシカ）へ赴き、日本語通訳（千徳太郎治）を雇い入れたが、サハリン島知事が出国を許可せず、2週間余り足止めを食らった。

六月二十四日（二十日？）、エディソン式蓄音器一式を携えたプロニスワフは、千徳太郎治を伴ってコルサコフを出港し、海路函館へ向かった。

七月八〜十日頃（グレゴリウス暦^三、ピウスツキ一行は函館港に到着したと推定される。かくて発足したロシア地理協会調査団―シエロシエフスキ団長、ピウスツキ団員、千徳通訳―は、直ちに調査計画を策定する。

七月三十日、函館にはすでに「数週間」滞在しており、千徳の協力でアイヌ語テキストの露訳を完成させて、今は弟妹との面会に北サハリンへ赴いたシエロシエフスキの帰函を待機中、とシュテルンベルグへ報告している。シエロシエフスキは七月三十一日か八月一日に帰函したと推定される。

八月二日頃、ピウスツキは函館で路頭に迷うアイヌたちと遭遇する。和人に騙されて、大阪から辛うじて函館までたどり着いた、白老のノムラ・シパンラム（野村芝蘭）ら一行であった。調査費から5円を捻出して野村らの帰郷を支援した。これが機縁で、調査団はまず白老村を訪ねることとなる。

八月四日夜半、シエロシエフスキ、ピウスツキ、千徳の3名は「肥後丸」に乗船して室蘭港へ向かう。

八月五日早朝、「肥後丸」が室蘭に入港。一行は、室蘭から鉄道で白老駅に至るも出迎えはなく、線路北側の和人集落の小旅館に荷物を預けて、南側のアイヌ・コタンへ赴く。散策中の3名はシパンラムの姉妹イシュウチ、妻ネンタシク、兄らと遭遇し、シパンラムの広壮な「チセ」に案内される。シパンラムは、賓客に鮮魚を振る舞うべく出漁して不在だった。シパンラムの兄（名前不詳）はその後、彼らを海辺へ案内する。3名は夕刻に旅館へ戻って就寝。

ニピウスツキの「復命報告5」はコルサコフ出発を「六月二十日」と明記するも、在コルサコフ日本領事館が発行した「蓄音機等搬出許可書」の日付は「七月七日」（露暦「六月二十四日」）であった。本「年譜」では後者を採用する。

三露暦では六月二十五〜二十七日頃。以降、北海道滞在中はグレゴリウス暦を採用する。

八月六日朝、就寝中の彼らの部屋をシパンラムが訪ねて、アイヌ式挨拶「カラプテ」を交わし合う。その後、アイヌ・コタンでの宿泊をめぐる交渉が展開されて、（白老郡各村戸長役場の）「各村戸長」から了解を取り付けることを条件に、シパンラムが自宅への受入れを同意するや否や、当の各村戸長（佐伯茂治）が登場して「許可」を与えた。同日夕刻、調査団の3名はシパンラム宅に転がり込んで、食客となる。

八月七日朝、シパンラムは即席の五右衛門風呂をしつらえさせて、客人に朝風呂を提供する。旅の疲れと汚れを洗い落とした3名は、心機一転して、白老での調査研究に着手した。

八月十二日正午前、白老コタンの野村芝蘭宅にさしかかった「青森の人」飯島桂と友人の生田は、ピウスツキ呼び止められて、そのままチセ内へ連れ込まれる。飯島は、シエロシエフスキもピウスツキも「上着をぬぎ、日本の単衣を纏ひ、ポンチ絵の如き姿にて研究し居たり」（飯島「北海道紀行其二」³⁶）と記している。早くも午後一時には、調査団の3名と日本人2名が連れだつて社台へ赴き、顕著に和風化された田村弥吉宅で休息する。彼らは夕刻に野村宅へ戻り、風呂をつかい、アイヌ料理に舌鼓を打ったのち、ピウスツキの蓄音機から流れる「樺太アイヌの諺歌」に耳を傾けた（前掲記事³⁶、³⁷）。この夜は、彼ら5名とシパンラム夫妻が大きなチセで雑魚寝する。

以降八月末前後まで、調査団一行は白老に滞在する。シエロシエフスキの旅行記「毛深い人たちの間で」は、白老とその周辺の風物やアイヌの生活をつぶさに記録するが、正確な日付を欠くため「年譜」への収録は不可である。詳細は同旅行記（井上²⁸）に収録の記載に譲りたい。

八月末前後のある日の正午、平取を目指す調査団一行は、白老駅頭でアイヌらが見送る中、列車で白老を発つて早来駅へ向かった。早来では乗馬教頭と道案内を雇い、小さな旅籠屋に一泊する。

翌日、日高地方の原生林を騎乗踏破し、鷓川で一泊。平取までの行程は白老から鷓川までが30^キ、鷓川から平取まではさらに30^キ、併せて60^キである。鷓川では、ジョン・バチエラーの布教で長老派教会に帰依した「プロテスタントのアイヌたち」が、バチエラー師の札幌からの指示で調査団を出迎えた。

翌々日、調査団一行は日高山麓の山道を走破して沙流川の河岸に達し、同日午後には平取（ピラトリ）コタンに到着する。村で唯一の旅籠屋に止宿した。九月初旬のことと推定される。シエロシエフスキの「毛深い人たちの間で」における平取

の件は白老に比して精彩を欠くが、一週間余りの滞在と想定されるからやむを得まい。シエロシエフスキが記す波乱万丈は、とみに陰悪化してゆく日露関係をもろに反映していた。調査団は、函館のロシア領事を介して伝えられた、在京ロシア大使館の調査中止命令には抗えなかった。しかし、ピウスツキが平取で遂行した調査は、短期間とはいえ頗る実り多いものだったようだ。のちに執筆する学術論文では、平取で聴取した情報にかなり言及していたからである。

九月十日頃、調査団一行は騎乗で平取を後にして最寄りの鉄道駅——やはり早来であったと想定される——に至り、一両日中には札幌に到着したであろう。

九月十二日前後、シエロシエフスキ、ピウスツキ、千徳の3名は札幌入りを果たしたと推定される。バチエラーの「珍客来る」(『ジョン・バチラー自叙傳』²⁸⁸)によると、彼らは「二三日」札幌に滞在し、ピウスツキはバチエラー宅に「少時」宿泊したとある。一方、シエロシエフスキは「一日」——即ち九月十五日(?)——、「豊平館に投宿し、道廳に出頭」した(小樽新聞九月十七日付記事「波蘭人の土人研究」本書²⁸⁹)。札幌での彼らの動静は概して不明であるが、唯一知られるのは、シエロシエフスキが「博物館」を訪ねたという事実である。恐らく一八八一年、北2条西8丁目に設置された札幌農学校「札幌博物館」であろう。千徳が通訳としてこれに同行したのは確実ながら、ピウスツキの参加は不詳である。

九月十五日早朝(?)、調査団一行は、札幌駅のホームでバチエラーに見送られて札幌を後にした(バチラー「珍客来る」²⁸⁸)。室蘭到着後、ピウスツキ(と千徳?)は、そのまま連絡船に搭乗して同日中に函館に至るが、シエロシエフスキの函館帰着は九月十七日だった。別行動の経緯は不明である。

九月十九日、ロシア地理協会調査団が函館で解散し、ピウスツキと千徳は「半月ほど」(?)日本に滞在したあとサハリンのコルサコフへ向かった。

九月二十四日^四、ピウスツキと千徳がコルサコフに帰着。

九月二十九日、アイ・ユタンの定宿に戻る。

九月下旬、プロニスワフとチュフサンマは、バフンケ酋長の「取計らひで……」全部落民が集まつて盛大な結婚式を挙げ

四 グレゴリウス暦では十月七日。これ以降、露暦に復帰する。

た」（樺太日日新聞一九三四年一月十日付記事「愛し夫よ何處？」、井上 2013: 86 頁）^五。

アレクサンドロフスキのリャプウノフ知事から、九月二十八日付の私信が届く。知事はコルサコフ管区のアイヌ実態調査と、「異族人統治法」改正にかかわるサハリン案の起草を懇願していた。ピウスツキは南サハリンでの民族資料収集に加えて、これらの2課題も請け負うことになる。

十月十四日～十一月二十九日、コルサコフに長期滞在して、ナイブチに開設する識字学校のために資金や現物（学用品・図書）の寄付を募る。フォン・ブンゲ知事代行からは支援金（200ルーブリ）の約束も取りつけた。なおこの頃、一九〇二年十二月までの調査報告として「ロシア委員会」宛「復命報告1」（一九〇二～一九〇三年の樺太アイヌへの旅の予報）が擱筆されたと推定される。十月末、ロシア義勇艦隊社の「ヤロスラヴリ」号にて、東海岸で買い付けた標本類を収めた貨物と梱包荷物一箱（これにはアイヌ語テキストとその逐語訳を収めた帳面3冊、アイヌ・フォークロアを収録する蠟管、そして右記の「復命報告1」が収められたと推定される）が、サンクト・ペテルブルグへ向けて送り出された。コルサコフ滞在中は日本人（とりわけ東北方言の話者）らの協力を得て、北海道で蠟管に収録した日本語テキストの解読も試みた（井上 2013: 46 頁）。

十一月二十九日、この年最後の日本船がコルサコフ港を出航したあと、コルサコフを発つてナイブチ（内淵村）に到着。十二月二日、内淵に開設された寄宿制学校では、千徳太郎が教師を務める傍らで、ピウスツキも教鞭を執った。特に瞠目されるのは、アイヌ語をキリル文字で表記する形での作文指導である。自然発生的に「アイヌ文語」が成立してゆく。千徳らは一九〇六年、滞日中のピウスツキとの間で、まさにこの「文語」を用いてアイヌ語で手紙を交換しあった。十二月十八～二十日、生徒たちを引率してアイ・コタンへ赴き、バフンケと共催の「狐送り」の儀式に参加する。

一九〇四

一月二十一日、ロシア帝室地理協会は、学術研究への顕著な寄与に対してピウスツキに銀牌を授与。特に評価されたのは、ペテルブルグの人類学民族学博物館（クンストカメラ）のために収集した樺太アイヌ資料とその整理分析、地理協会が派遣した北海道アイヌ調査への参加協力、OIAKの博物館主事および書記としての業績などである。

五但し、記事に「年」の記載はなく、編者の状況判断で同項を「一九〇三年」に編入した。

一月二十九日（グレゴリウス暦二月十日）、日露戦争勃発。ナイブチの寄宿制学校では、開戦の報に怯えた親たちが先を争ってわが子を引き取りだして、予定の三月末を待たずに閉校を迎えた。

二月十二日、チュフサンマがピウスツキの長男木村助造を出産^六。

三月三十一日～十一月十三日、戦時下にもかかわらず、前年六月に急遽中止した北サハリン踏査を敢行する。アイ村を大樫で出発したピウスツキは東海岸を北上して、四月五日に最北端の村ナイエロ（内路、現ガステロ）、翌六日にはタライカ（多来加）地区のチフメネスク哨所（敷香、現ポロナイスク）に至る。

四月六日～六月十二日、多来加地区に滞在してアイヌ、ウイльта調査に従事（北サハリン踏査の詳細は、『ピウスツキのサハリン民族誌』所収の「復命報告3」「復命報告5」を見られたい）。

六月二十五日～七月十七日（グレゴリウス暦七月八日～三十日）、弟のユゼフ・ピウスツキが来日して東京に滞在する。ユゼフは、日露戦争で捕虜となったロシア軍将兵からポーランド人を選抜して戦闘部隊を組織し、満洲戦線へ投入する案を以て外務省や参謀本部と掛け合うが、成就しなかった。

六月十三日～十月七日、プロニスワフの方は、チフメネスク哨所からポロナイ川を舟で遡上したのち、陸路でティミ川上流部へ至り、近在する河谷に立地するニヴフ集落（ウスコヴォ、ハジリヴォ、スラヴォ、コムルヴォ、チルヴォ、プロヴォ、ウルクルヴォ）を舟で巡回して、ニヴフ調査に従事した（七月十三日～八月九日）。その前後にはティモフスク管区のロシア人村落オノール（六月二十四日～七月八日、九月二～二十五日）や、刑期を勤めたルイコフスコエ村（八月十日～九月一日）にも滞在する。当初はオノール村で越冬する心積りだったが、予定を変更し、九月二十五日には同村を去って帰途に就く。

八月、一九〇三／四年の冬に内淵で実施した識字学校の活動報告をルイコフスコエ村にて攔筆。

九月二十六～二十八日、ポロナイ川を下り始めるや猛烈な台風と遭遇、アブラモフカ村に避難する。

九月二十九日、増水したポロナイ川に漕ぎ出したところで「水面に突き出た倒木の切り株に」舟が激突して、あわや沈没という修羅場も体験する。

^六 子息木村和保氏の御教示によると、昭和三十八年九月十四日付で作製された戸籍原簿では、父上の生年月日が「明治三十六年二月十二日」と記載されているとのこと、生年は一九〇三年である。しかし、編者はそれを一年遅らせることを余儀なくされた。

十月七日、チフメネスク哨所を経て内路村に到着。当初の計画では同村で熊祭りに参加し、また内淵から千徳も呼び寄せて、内路のアイヌやチフメネスクのウイルタ子弟のために識字学校を開設する予定だったが、戦時下の混乱でいずれも実現せず、内路にて4名の少年に識字教育を試みた。同村には十一月一日まで留まる。

十一月二〜三日、古丹岸（現ゴリヤンカ）泊、四日にヤンケナイ川付近の海岸で野宿、五〜十日はフヌツプ（斑伸）、フレチシ（婦禮）、アカラ（赤浦）、モトマリ（元泊）泊。十一日にセラロコ（白浦）、十二日はオタサン（小田寒）泊。

十一月十日付で「復命報告3」を（恐らく元泊で）擱筆。

十一月十三日、妻子の待つアイ村に帰着。
十一月十六日、コルサコフに赴く。これ以降は一九〇五年二月十日まで活動拠点を同地に移した。戦時下での人心の動揺、飢餓、物価高騰を目の当たりにしたピウスツキは、予定していた西海岸調査を断念し、離島して大陸に戻ることを真剣に考え始める。

十一月末、小田寒、白浦を訪ねて熊祭りに参加する。

十二月頃〜翌年二月頃、戦時下で識字学校の開設が叶わぬため、希望者を対象に「訪問授業」を実施。訪問教師を務めたのは千徳太郎治と、インデインの教え子である十八才のトウイチボ。前者はルレ、ナイブチ、アイ、オタサン、セラロコの5村、後者は自分のシヤンツィ村をそれぞれ担当した。

十二月二十日（グレゴリウス暦では一九〇五年一月一日）、旅順要塞が陥落。この事件がピウスツキに樺太島脱出の決意を固めさせたようである。

一九〇五

一月二十七日〜二月九日（?）、シヤンツィ、ナイブチ、アイ、オタサンを歴訪。

二月十〜二十三日、最後のコルサコフ滞在。離島を控えての残務整理―収集した民族標本の発送と保全措置、採録したテキストの翻訳、統計データの収集、標本を製作したアイヌらとの決済など―に奔走する。

二月二十三〜二十六日、ウラヂーミロフカ（豊原、現ユジノ・サハリンスク）に滞在。旅の携帯食料を辛うじて確保することができた。

三月一〜五日、アイ村にて身辺整理。五日にアイを発ち、妻のチュフサンマ、息子の助造と離別する。

三月六日、オタサン村にて友人のシャマンが「別れの巫儀」を執行してくれた。

三月十日、ピウスツキは七日にマグンコタン（馬群潭、現プガチョヴォ）に至り、犬橇の到来を待機していたが、この日に北へ向けて出立。内路（十一日）を経由してチフメネスク哨所へと向かう。

三月十二〜二十三日、チフメネスク哨所に滞在。折しも感冒（インフルエンザ）が猖獗を極めて、ピウスツキも罹患したため、出発に大幅な遅延が生じた。

三月二十八日〜四月十三日、オノール村に滞在。

三月、リャプウフ知事に委嘱された「アイヌの生活整備と統治に関する規程草稿（トムスク手稿）」をオノール村にて攔筆。

四月十三日〜五月十二日、ルイコフスコエ村に逗留。同村滞在中には「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」、「アイヌ統治に関する規程草案」——即ち、リャプウフ知事に提出された改訂稿（ウラヂヴォストク手稿）——を、この順序で攔筆したとピウスツキは記している。

四月二十八日、一九〇四／五年の冬に実施した識字学校の活動報告をルイコフスコエ村にて攔筆。

四月三十日、一九〇四年八月十一日付特赦令にもとづき、首都を除く帝国全域の希望する場所に居住も可なり、とのリャプウフ知事の裁定がピウスツキに到達された。念願のヴィルノ県（現リトワニア共和国）への帰郷が可能となる。

五月十二〜三十日、デルビンスコエ村（現テイモフスク）に滞在。

六月十一日、小型舟艇「ウラヂヴォストク」号でアレクサンドロフスク港を発ち、樺太島を脱出した。

六月十二日、アムール河口のニコライエフスク（尼港）に到着し、十日間滞在する。ハバロフスクへ赴く途上ではマリインスクにも数日間立ち寄り、アムール地方に在住するアイヌたちの消息を訊ねた。

七月初旬、ハバロフスクに到着。

七月十四日、中央・東アジア研究ロシア委員会のW・ラドロフ議長宛近況報告を攔筆（復命報告4）。ハバロフスクで接した同委員会シュテルンベルグ書記からの手紙で、約束された「欧州部」ロシアまでの無料乗車券」は送付できぬと通告さ

れて「悲嘆に暮れています」と訴えている。

八月初め、3年ぶりにウラヂヴォストクに戻る。

八月五日と十二日、「ピウスツキOIAK準会員によるサハリン調査の成果討論会」と銘打つOIAK主催の連続講演会が実施される。プログラムは(1)異族人の許への旅、(2)サハリン異族人の歴史的過去、(3)異族人をめぐる学術協会の課題、を謳っていたものの、十八日に予定されていた第三回討論会は、開会の1時間前に日露講和の知らせが届いて流会となる。

八月二十三日（グレゴリウス暦九月五日）、日露間のポーツマス講和条約が締結される。

九月中旬⁷⁾、日本占領下の南サハリンを訪ねて、アイ村で家族（チュフサンマ、助造と会う。家族の引取り交渉は、バフンケ酋長の峻拒に遭って不首尾に終わる。家族との永久の「訣別」。

十月初旬、神戸を訪ねてニコライ・ラッセル（スチロフスキー）の事務所を手伝う。

十一月五日、ハバロフスクの全市民集会で演説、「市民ビューロー」設立を提案して100ルーブリを寄付。

十一月の十日間、OIAKの委嘱により、アムール中流域のトロイツコエ村でナーナイの民族資料収集に従事する。

十二月五日（グレゴリウス暦十二月十八日）、友人のN・P・マトヴェイエフ（詩人としてニコライ・アムールスキーとも号した）、彼の十一歳の娘ゾーヤとともに、ウラヂヴォストクを出港して日本へ向かう。この日以降、ピウスツキがロシアの地を踏むことはなかった。

十二月七日（グレゴリウス暦十二月二十日）前後、ピウスツキら一行の乗船は、恐らく敦賀港か門司港に入航して、脚部疾患治療のため入院するゾーヤを、ピウスツキも福岡医科大学病院まで送り届けたと推測される。

十二月八日、ピウスツキの長女木村（結婚後の姓は大谷）キヨ、アイ村で誕生。

一九〇六

一月初め前後⁷⁾、ピウスツキ上京。

⁷⁾ 露暦では十二月中旬に当たる。これ以降はグレゴリウス暦を採用し、必要の際は露暦も括弧内に併記する。

一月六日頃、報知新聞記者の取材を受ける（報知新聞一月七日付記事「浦鹽よりの二珍客」、井上 2018: 838~840）。記事にはピウスツキが築地の「セントラルホテルに投宿」とある。同記事は一月十日付の北海タイムスと馬關毎日新聞にも、ほぼ同じタイトルで転載された。

なお、7ヶ月半に及んだ日本滞在中の彼の動静は、澤田和彦作成の「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」が詳述しているので参照されたい。本「年譜」では重要事項を摘記するに留める。

一月下旬〜七月初旬、京橋区尾張町の箱館屋裏二階に居を定める。ピウスツキが在京中に親しく付き合ったのは二葉亭四迷（長谷川辰之助、横山源之助（天外）、上田將、宮崎民蔵・寅蔵（溜天）兄弟、福田秀子、橋糸重らである。坪井正五郎、鳥居龍蔵、關場不二彦（理堂）、小谷部全一郎、神保小虎、村尾元長などアイヌ研究者、また黄興、宋教仁など民報社系の中国人革命家、そして亡命ロシア人たちとも交流があった。新聞に掲載された関連記事は「露國人類学者」（東京朝日新聞、二月八日付）、「日本婦人の研究」（報知新聞、三月九日付）、「外人の日本婦人研究」（北海タイムス、三月二十日付）など。

三月十六日（露曆三月三日）、ロシア交通省事務局がウラヂヴオストクのピウスツキ宛に、サンクト・ペテルブルグまでの無料鉄道乗車券（二等車2席分）を送付する。2席目はチュフサンマ用だったかも知れぬが、余りにも遅すぎた。

六月十八日頃、本郷の中黒写真館で二葉亭と記念撮影を行う。

六月、肉親がパリ経由の電信為替で、長崎の「ヴォーリヤ」社気付として送金した5000〜6000ルーブリ（帰国旅費）が到着する。しかし長崎では受け取れず、結局、発信地のクラクフで受領することとなる。

七月、東京を後にして長崎へ赴く。長崎では稲佐の志賀親朋宅に居を定めた。

七月十日、アイヌ関係処女作の「樺太アイヌの状態」（上）が、上田將の翻訳で京華日報社の月刊誌『世界』26号で公刊される。これは、ピウスツキがルイコフスコエ村で擱筆した「樺太アイヌの経済生活の概況」の縮約稿邦訳である。

七月三十日、米国の大北汽船会社の「ダクタ」号に搭乗して長崎を離れる。

七月三十一日に神戸に寄港した「ダクタ」号が八月一日、横浜に入港する。

八月三日、「ダクタ」号が横浜港を出航し、太平洋上を一路シアトルへ向かった。

八月十日、ピウスツキの「樺太アイヌの状態」（下）が『世界』27号に掲載された。

八月十六日頃、「ダコタ」号がシアトルに入港。以降は大陸横断鉄道で米国を東進、シカゴを経由してニューヨークに到着。さらに大西洋を横断して欧州に至り、ロンドン、パリを経て、オーストリア統治下のポーランド（ガリツィア）に到着する。

十月二十一日頃、ポーランドの古都クラクフに着き、弟ユゼフの滞在する保養地ザコパネへと向かう。十九年半ぶりの兄弟再会。

十一月七日頃、クラクフに戻り、翌年の五月末までこの町に居を据える。

十一月二十日（露暦十一月七日）、サハリン島知事は、一九〇五年十月二十一日付特赦令にもとづき、ピウスツキに対する警察の監視と、首都での居住制限を解除し、また裁判で喪った諸権利も復活させる、との裁定を通過する。遅まきながらピウスツキ家の領地・資産の相続権が回復され、首都にも住めるようになった。

十一月二十一日、二葉亭四迷宛書簡に「すでにこちらで私に許嫁が用意されていて、たぶん結局は結婚することになるでしょう……。私は彼女と二十年も会っていませんけれど」と記した。これは、マリア・ジャルノフスカに関して確認できる最も早い言及である。彼女は旧姓バニェヴィチ、プロニスワフの初恋の相手（ソフィア・バニェヴィチ）の年子の妹で、彼にとつては単なる幼馴染に過ぎなかった。一八八六年の秋、姉のゾフィアとの仲を引き裂かれて落ち込むプロニスワフに同情するうちに、二人は相愛の仲になった模様である。マリアは一八八九年にペテルブルグで、かなり年上の資産家ヤン・ジャルノフスキ（イヴァン・ジャルノフスキー）と結婚したが、この当時は、一人息子のヤンを夫の許に残して別居中であった。

クリスマス週間、ヴィルノに在住する末妹ルドヴィカや叔母のステファニア・リプマンが、相次いでプロニスワフを訪ねる。ルドヴィカは一九〇三年の秋、サハリンを訪ねることを計画するも、日露関係の紛糾で断念していた。積もる話に花が咲いたであろう。

年末、ペテルブルグ在住の弟カジミエシュがマリア・ジャルノフスカの住所を、兄の求めに依って手紙で伝える。

一九〇七

一月二十一日頃、ペテルブルグのジャルノフスカ宛に「懐旧」の文を記すも発送しなかったが、四月十六日には第二信

を執筆する。いざれでも、彼女が一九〇三／四年のクリスマス週間、サハリンのプロニスワフへ電報を送った事実には及しており、それへの返信との心算が窺える。第二信では「夏にザコパネへ行きます。そこで会うのはどうでしょうか。いずれにせよ蒸し暑いピーテルを、数週間は後にされるでしょうから」と記していた。

五月十七日、マリア・ジャルノフスカがクラクフに到来する。二十年ぶりの再会であった。

六月初め〜七月後半、ジャルノフスカとともに現チエコの保養地カールスバード（カルロヴィ・ヴァリ）で静養する。

八月、カールスバードからクラクフへ戻り、ほどなくガリツィアの保養地ザコパネへ居を移す。その後8ヶ月間、同地が拠点となる。プロニスワフとマリアは当初、学生用ホステルに投宿するが、十一月以降はクルプフキの食餌療養ペンション「ヴィラ・ヒュゲア」で愛の巣を営む。

夏、ピウスツキ家の4兄弟がタトラ山中―ユゼフの山荘であろう―で家族会議を催す。出席したのは、ヴィルノから訪れていたヤンとその妻マリア、ユゼフとその妻マリア、ペテルブルグからのカジミェシュ、そしてプロニスワフとその同棲者マリア。奇しくも女性たちはすべて母親と同名だった。

九月九日、二葉亭四迷宛書簡に「あなたにまずお伝えしたいニュースは、私の結婚です。妻の写真を送ります。妻は私の幼馴染です」と記した。

十月二十二日、マリア・ジャルノフスカは5ヶ月の同棲生活を切り上げて、ザコパネを後にする。彼女はクラクフ、ワルシャワ、ヴィルノを経てペテルブルグに戻った。プロニスワフは、その直後から十二月にかけて、心情を吐露する情熱的な手紙三十余通をマリア宛に執筆する。そのうちの17通はヤン・スタシエルが二〇〇三年に公刊しているが、十一月二十三／四日付の手紙では、フィンランドを希望するマリアの意向にもかかわらず、ルヴフで共同生活を開始する提案を伝えている。

十二月十九日、アメリカ人類学の父と称されるボアズ（Franz Boas）と、シロテルンベルグ（Leo Sternberg）の紹介で英文書簡を送り、アイヌに関する己の研究成果の売り込みを図る。8ヶ月にわたって月俸120ドルが保証されるならば、アイヌ・フォークロアの露語訳テキスト240篇を仕上げて提供できると記した。書簡にはアイヌ研究の詳細な成果一覧が添付されて、研究成果を一望できるが、なかなんぞ「写真300葉、蠟管115本」との記載は特記に値する。

この年、「樺太アイヌの経済生活の概況」と「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」がウラヂヴォストクで公開された（ともに『アムール地方研究会紀要』10号所収）。前者は一九〇六年の夏に東京で上梓された「樺太アイヌの状態」のロシア語原典に当たる。

一九〇八

一月後半、マリア・ジャルノフスカがクラクフに再来。彼らはザコパネの「ヴィラ・ヒュゲア」に逗留する。

三月頃、プロニスワフとマリアは、ガリツィア東部の都市ルヴフ（現リヴィウ）へ転居する。

五月二十日、ニューヨークのボアズへ第2信を送る。5ヶ月前の第1信で記した報酬（960ドル）が高過ぎる場合、支弁可能な額の提示を求めた。プロニスワフはルヴフでの生活費を確保するべく、値引き交渉を申し出たわけである。第2信ではサハリン研究に関する執筆計画を詳細に開示していた。今度は「蠟管100本」と記載している。

ルヴフ期のプロニスワフは、一年足らずとはいえマリアという伴侶を得て充実した至福の時を過ごしたであろう。それは、以降の数年間にポーランド、ロシア、ドイツ、イギリス、フランス、スイス、アメリカの学術雑誌に発表された夥しい数の論文からも覗える。マリアは声楽のレッスンに通って、生計を支えるべくプロの歌手を目指した。しかし、彼女は発病して乳癌と診断される。

一九〇九

一月十四日、プロニスワフは同日付の手紙で「妻はすでにペテルブルグにおります」とシユテルンベルグに報じている。マリア・ジャルノフスカは乳癌手術のため、年初にはペテルブルグの「法律上の夫（ヤン・ジャルノフスキ）」の許に戻ったものと判断される。

同じく年初、ニューヨークのボアズから来信があり、シカゴのフィールド博物館が6千ドルの予算を計上してアイヌの民族標本蒐集を企画中だから、サハリンでの収集計画を立てて応募するよう奨めた。（マリアがペテルブルグで投函したと推定される）プロニスワフのシユテルンベルグ宛書簡は、シカゴへ受諾回答を送付する（二月九日消印）も、シカゴから返事がないとこぼし（三月二日消印）、改めて、九ヶ月の報酬と生活費を合わせて2千ドルという新提案をシカゴへ送ったと記している（三月八日消印）。

五月十日、鶴首したシカゴからの回答をようやく落掌したとボアズに報告する。シカゴ・フィールド博物館のドージー（George Amos Dorsey）人類学担当学芸員は、同館がピウスツキを「アイヌの許へ派遣し、総額6千ドルを確保するべく措置するでしょう」と報じ、ボアズの指導監督を付帯条件として挙げていた。

五月、マリアの手術が、ヘルブルグで執刀された結果、乳癌はかなり重症で転移もあることが判明する。

八月〜一九一一年一月の18ヶ月間、プロニスワフはルヴフの有力紙「クリエル・ルヴオフスキ」の通信員も兼ねて西欧諸国を遍歴した。その際は売却用にアイヌの工芸品や、フォークロア・テキストを収録した蠟管も携えていた。

十月〜翌年五月、パリに7ヶ月滞在する。大学区の周辺で転々と居を移しながら図書館通いを続け、ソルボンヌ大学の聴講生でもあったらしい。マリー・キュリーなど、フランス在住のポーランド知識人たちとも交際する。

十一月七日、滞欧中のドージーから便りがあったことをシュテルンベルグへ報告する。ドージーは出会いの遅延を詫びながらも、二、三ヶ月後にはガリツィア入りが果たせそうだから、その機会にルヴフのプロニスワフも訪ねたいと述べていた。ドージーはその際、「本件を私の館長に報告し、彼の許可を得るまでは、御自身がフィールド博物館に雇用されたいと決まらずに考えないでください」と釘をさしている。プロニスワフは次のように返答した。「私は目下パリにおりますので、是非とも当地でお会いしたい。さもなくば、御指定の場所へ赴く用意もあります」。この時点で、彼がアイヌ調査に一縷の望みを託していたことは明らかで、その実施に関して一九〇九年冬と一九一〇年の両案をシュテルンベルグに書き送っていた。そこにはまた「間もなく妻が到着します」との記載も見出される。術後に小康を得たマリア・ジャルノフスカが再びプロニスワフの許へ走るといふ事態が出来したのである。

十一月中の執筆と推定されるシュテルンベルグ宛書簡は、マリアの再手術、アパート・医師・病院の探索、病人の看護に十日も忙殺されて、仕事の中断を余儀なくされたことと記すから、十一月半ばにはマリアがパリに到来したようである。

十二月七日、マリアは、キュリー夫人が発見したラジウム線を用いての放射線治療を受けることになった。再手術後に退院したものの、一週間足らずで激痛が再発したからである。ラジウム線治療は2ヶ月ほど試みられると、シュテルンベルグへ報じていた。

一九一〇

四月、病状が悪化して再々手術が必至となるや、マリアは自らの意思でパリを離れた。パリに到来した「法律上の夫」が、彼女をペテルブルグに連れ戻したという情報もある。

六月初め、翌年一月、ロンドンに滞在する。日英博覧会で「アイヌ村」を実演する沙流アイヌ（男女各4名と子供たち）と会って、聴取り調査を試みるのが目的だった。博覧会の通行証を入手するまでに7週間を要したものの初志は貫徹して、50篇以上の説話を採録する。若干のアイヌ工芸品や蠟管の売却にも成功したらしい。

この年、「アイヌ」と題する辞典項目が、F・A・ブロックハウス、I・A・イエフロン共編『新百科辞典』（第一巻、サンクト・ペテルブルグ刊、邦訳は井上²⁰⁰⁸に所収）に収録される。

一九一一

一月末、パリを経由してクラクフに戻る。

五月十二日、マリア・ジャルノフスカがサンクト・ペテルブルグにて永眠。

夏、翌年四月、ポトハレ地方の大地主ザモイスキ伯爵に招かれて、クウジニツェの屋敷に滞在する。同伯爵と語らって、郷土誌研究会の設置計画をぶち上げることで元氣を取り戻してゆく。

七月十八、二十二日の一日、クラクフで開催された第十一回「ポーランド医師・博物学者大会」で「ギリヤークにおけるハンセン病について」と題する報告を行う。

九月二十四日、ザコパネ発信のシュテルンベルグ宛書簡は、博物館事務部全般の不誠実さに言及する中で、「ドーギーが事を遅延させ、会う約束をしたのに何の相談もなくヨーロッパから去ったことを恥ずべきは自明ながら、彼もまた私に返事を寄こさなかった」と記している。一九〇九年にボアズの仲介で始まったフィールド博物館の一件は挫折したようである。但し、ドーギーは一九〇九年に博物館を休職し、シカゴ・トリビュン紙特派員として一九一二年まで滞欧していた。

十一月二十五日、プロニスワフの発議で、郷土誌研究会はタトラ協会の民族学部門として発足する。彼はその議長に就任し、地元ポトハレ地方の郷土誌研究を組織する。剩え、収集品を収蔵・展示する施設として、タトラ博物館新館の建設までも構想する。

一九二二

五月〜十二月、ビストレにあるコルニウオヴィチ医師の持ち家に居を定める。それはクウジニツェとザコパネの中間に位置しており、三十年後にはまさにこの家の屋根裏部屋で、ピウスツキの残した蠟管が発見されることになる。

九月頃、主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』（英文）がクラクフのポーランド人文・科学アカデミーから上梓された。

十月、博物館事情視察のためプラハへ向けて旅立ち、（恐らく）現スロヴァキアのマルティン、そして現チェコのヴィノフラデイを訪ねた。

十二月、プロニスワフはクラクフとザコパネを駆け抜けて、スイスのヌシャテルへ向かった。その前に、民族学部門の議長職辞任を唐突に申し出るも受け入れられず、彼は国外から送付する手紙によってその職責を全うし続けることになる。

一九二三

一月三日〜五月、ヌシャテル大学でファン・ヘネップ（Arnold van Gennep）の講義を聴講し、「熊祭り」論文を推敲し、「イノウ」オロツコ」に関する論考とも取り組んだ（一九一三年二月九日付シュテルンベルグ宛書簡）。その間には論文「ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病」（井上 2018 に収録）を摺筆した。

五月初め〜七月十日、パリに滞在。

六月二十五日、タトラ協会宛に書簡を執筆するが、そこには「ギネットIIピウスツキ（Ginter Piusdzki）」という署名が初めて見出される。ギネット家はリトワニア大名家に連なる由緒ある家柄で、ピウスツキ家の本家筋に当たる。プロニスワフはこの頃、己をリトワニアとポーランドの狭間に立つ者、ないしは両者を統合する者と見做す境地に達したものと付度される。遂には Ginter-Piusdzki と古風に綴るに至る。

七月十日〜十月、ベルギーのブリュッセルに滞在、ソルヴェー社会学研究所で仕事をする。

八月三日、ザコパネではタトラ博物館新館の起工式典が挙行されるも、ブリュッセルに滞在中のプロニスワフは欠席した。

十月、ザコパネ郊外のビストレに戻り、民族学部門議長として、郷土誌研究の組織化と推進に本腰を入れる。守備範囲

は地元ポトハレからオラヴァ、スピシュ地方へと広がっていった。加えて、彼はタトラ協会の幹部でもあり、また創刊が決定された『ポトハレ年報』の編集主幹も務めた。

十一月末、論文「樺太島のおロッコへの一九〇四年の旅より」（井上 2018 に収録）を掲筆。
一九一四

三月、クラクフのポーランド人文・科学アカデミーが民族学委員会を新設し、プロニスワフはその書記に任命される。このポストは同委員会での唯一の有給職員（年俸600クロネ）だったが、彼が7年間の欧州生活で手にした初めての定職・定収入である。彼はザコパネもしばしば訪れて、『ポトハレ年報』創刊号の編集作業を完了させている。グラブリマでは目を通したものの、印刷された本冊を目にする機会はなかった。『年報』創刊号は一九二一年にようやく刊行されて、巻頭にはシェロシェフスキの手になるプロニスワフの追悼文が掲げられている。

五月二十三日、プロニスワフは同日付のボアズ宛書簡で、一九二二年刊の主著『アイヌの言語・フォークロア研究資料』の続編（第2巻）を執筆中と報じていた。これは遺稿として発見され、一九九〇年に上梓されている。

六月末頃、ブリュッセルに滞在する。石川三四郎が「十年前に日本にて懇親を結んだ」「ピルスツスキ」と、同地で遭遇したと伝えるからである。プロニスワフは一九〇六年二月二十五日、神田小川町の「牛屋」で催された新紀元社の晩餐会に招かれたとき、石川と会っていたようである。

八月五日、オーストリアがロシアに宣戦布告、第一次世界大戦が勃発する。

十二月初め、ロシア軍のザコパネ進駐が現実味を帯びてきてウィーンへ逃れる。同地には翌年四月まで4ヶ月余り滞在した。

プロニスワフはロシア国籍者であるが、米國横断中にロシア旅券を紛失しており、再発給の手続きを進めるも捗々しい結果は得られなかった。加えて、ロシアに入国するとシベリア送りにされかねぬ、という牢平たる信念を堅持していたとも伝えられる。したがって、ポーランド内を走る喫露国境の越境は執拗に逡巡し、故郷のヴィルノはおろか、ワルシャワですら訪ねることがなかった。

開戦後の欧州では概してポーランド人の3政治会派（①ロシア統治下のワルシャワを拠点とする民族主義志向の親露派、②ローザ

ンヌに結集して保守主義を標榜するポーランド人亡命者らの親西欧派、③ユゼフ・ピウスツキを領袖とするポーランド社会党系の親墺派が、それぞれの思惑で国家や社会の再建を果たすべく鎬を削っていた。戦時下のプロニスワフ・ピウスツキは、弟のユゼフと政治信条を共にするとはいえ、まったく不得手な政治に手を染めて、独自の政治的役割を果たすことになる。それはいわば敵対する二者を仲介し、和解を模索し、統合を志向するという役回りであるが、彼が生涯を通して追求した役割でもあった。

その嚆矢が、亡国ポーランドの実情を世に知らしむべく編集・公刊された『ポーランド百科事典』にまつわる一件である。当時は同趣旨の百科事典編纂がウィーンのみならず、ワルシャワやローザンヌでも別途に進行していたが、いずれも在米ポーランド人から寄せられる募金を当てにしていたため、3件の統合が焦眉の急となる。その纏め役としてプロニスワフに白羽の矢が立てられた。

一九一五

三月三十一日、ウィーンでオーストリア旅券が発給される。

四月、バンドウルスキ派（バンドウルスキ・ウィーン司教の率いる親墺派）はプロニスワフを、同派の百科編纂グループの正代表としてローザンヌへ派遣した。彼は激烈な論戦が交わされる中で公正な仲介役に徹して、数ヶ月後には統合を成し遂げる。『ポーランド百科事典』（仏文）は一九一九〜一九二〇年にスイスのフリブルとローザンヌで上梓された。

この年、ロシア帝室地理協会の『ジヴァアヤ・スタリナ』誌が、彼の白鳥の歌「樺太アイヌの熊祭りにて」を遂に公刊する（同誌発刊23年度I/II分冊、ペトログラード刊、邦語訳が井上2018に収録されている）。

一九一六

この年の初頭、ローザンヌに設置された「ポーランド・リトワニア委員会」の議長に就任する。ポーランド国家再興におけるリトワニアの処遇が主要な議題だった。プロニスワフは、自分と志を共にする旧リトワニア大公国復興主義者と、リトワニアの分離独立を主張する民族主義者との和解を求めて奔走するも折合いをつけられず、結局、リトワニア民族主義者らは委員会から退席した。彼はその後、ポーランド・リトワニア合同に拘りつづけて、死の直前まで、三国分割以前の両国の緊密な関係を証する歴史文献集の編纂に携わっていた。

その後の数ヶ月も中立国スイスで戦火を逃れて、己の担当する『百科事典』項目の執筆に専念する。かなり長期に及ぶラペルスヴィルのほかに、ローザンヌ、ヴヴェイ、チューリヒ、ジュネーヴ、フリブルにも滞在したことが知られている。フリブルには『ポーランド百科事典』編集局があった。

一九一七

二月、ローザンヌとジュネーヴで「シベリアにおけるポーランド人」と題する一連の講演を行う。この講演稿は翌年、フランスのルピュイで印刷されて、販売益は全額が慈善事業に寄付された。

六月、チューリヒのポーランド協会の協力を取りつけて、戦場となったガリツィアの子供たちをスイスへ避難させる救援事業を立ち上げる。プロニスワフはプラテル・ツイベルク伯爵（欧州の貴族では最高ランクに属する高名な慈善事業家）と連名で在米の著名な音楽家パデレフスキへ電報を送って、米国での基金構築を要請した。ところがパデレフスキは、全米から寄せられた募金5万スイス・フランを、ポーランド協会に断りなく、ピウスツキとツイベルクの連名銀行口座に振り込んでしまった。この醜聞は「チューリヒ事件」と喧伝されて、協会幹部らはプロニスワフを強く非難し、剩ればの高潔さや愛国心をあげつらい、学術業績までも嘲笑の的にした。「チューリヒ事件」は彼の心を深く傷つけることになる。

八月十五日、「ポーランド国民委員会」がローザンヌに創設されると、連合国側は直ちに同委員会を、ポーランド人の政治的願望に応える唯一の代表機関として承認する。議長に就任したのは親露派の保守政治家ロマン・ドモフスキで、ユゼフ・ピウスツキの宿敵であった。当時のユゼフはドイツ軍に身柄を拘束されて、マグデブルクの監獄に収監されており、政治生命の危機に瀕していた。それを奇貨とみた国民委員会は、パリに設立した委員会代表部における常勤ポストをプロニスワフに提示する。後者はそれを受け入れた。

十一月半ば、プロニスワフはパリに到着し、同代表部の有給職員となつて、公館内の一隅に居を構えた。彼が国民委員会から託された仕事は広報関係で、とりわけ編集者として多忙であった。また誰とでも話ができる才能が買われて、委員会外の重要人物との応対もしばしば任された。

一九一八

春、ポーランド人将兵捕虜の多くが抑留されているルピュイを短期訪問する。同地ではポーランド語隔週刊誌『イエニ

エツ・ポラク（虜囚のポーランド人）が発行されており、同誌別冊として、彼の『シベリアにおけるポーランド人』の印刷が進められていた。ルピユイから戻ると、プロニスワフは同誌の読者たちを対象とする新聞の発刊を具申する。

四月二十七日、パデレフスキ宛に長い手紙を書き、「チューリヒ事件」における自らの関与を改めて釈明している。

五月三日、敵対する諸会派の和解を訴える覚書を欄筆し、多くの知友の間に自ら届けて回った。これは、いわば彼の遺書であったろう。プロニスワフの病状は目に見えて悪化し、寝室の空気が蒸し暑くて重過ぎると訴えだす。友人らが田舎での静養を勧めると、同意したかのようにも見えた。さらには、委員会における自分の政治的役割に対する疑念や、誰かが己に毒を盛るか、謀殺するのではないか、という恐怖を周囲に洩らすこともあった。

五月十六日、友人らが手配してあった診察時間に医師を訪ねたプロニスワフは、放心状態で戻ってきた。

五月十七日、早朝に起床して友人を訪ねるも不在だったため、「この世とおさらばするべく注射してもらいにやって来た。私にかけられた二つの嫌疑は、そのいづれでも私は潔白だ……」との書き置きを残した。芸術橋（ボン・デザール）の守衛は午前十一時四十五分、橋の上で上着を脱いでセーヌ川へ抛るや、己の身もそこへ投じた男を目撃する。プロニスワフはこのとき満五十一才五ヶ月半であった。

五月二十一日、午前八時十五分、プロニスワフの遺体がミラボー橋（ボン・ミラボー）の袂で見られる。

五月二十九日、「ポーランド国民委員会」がノートルダム大聖堂で計画していたプロニスワフ・ピウスツキの葬儀は急遽中止されて、遺骸はパリ郊外モンモランシーのポーランド人墓地へ運ばれた。埋葬儀式を執行したのは地元の教区司祭である。

後記

本稿は、二〇一八年に上梓された拙稿「プロニスワフ・ピウスツキ年譜」（井上紘一訳編『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』867~894頁所収）の増補改訂版である。

ピウスツキのヨーロッパ期をめぐる情報の主たる典拠は、ヴィトルト・コヴァルスキ論文“The European Calendarium”（1992, 1993, 1995, 2010）である。ここに明記して、コヴァルスキ氏に謝意を表したい。

参考文献

- （邦文）
- 飯島生「北海道紀行」『博物學雜誌』40:15～17（1903）、飯島桂「北海道紀行其二」同誌42:35～38（1907）
- 石川三四郎『ピルスツスキの想ひ出』『石川三四郎著作集』第6巻 279～284頁、青土社（1978）
- 井上紘一「プロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」加藤九祚・小谷凱宣編『ピウスツキ資料と北方諸文化の研究』（『国立民族学博物館研究報告』別冊5号）、45～65（1987）
- 井上紘一「B・ピウスツキと北海道——一九〇三年のアイヌ調査を追跡する」井上紘一編『ピウスツキによる極東先住民研究の全体像を求めて』11～31頁、札幌：北海道大学スラブ研究センター（2003）
- 井上紘一「日本の新聞が報じたピウスツキ関係記事（1903-1939）」（上・下）『関西外国語大学研究論集』91:267～280、92:185～201（2010）『井上2018に改訂稿収録』
- 井上紘一訳編『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌——二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルトク』（東北アジア研究センター叢書第63号）、仙台：東北アジア研究センター（2018）
- コヴァルスキ、ヴイトルト、井上紘一訳「プロニスワフ・ピウスツキの遍歴——日本出国から自殺まで」『ポロニカ』4:38～53（1993） [Bironova Koval'skii, "Izropeichskii Kachestva (Bronitsav Tinet-Ilavyskii v Evrope 1906-1918)", в: B. O. Ilavyskii — uchenoissannye napodob' Saxarima, T. 1, стр. 16-27, Южно-Сахалинск (1992) の邦訳]
- 澤田和彦「プロニスワフ・ピウスツキ日本暦」澤田和彦『幕末・明治・大正期の日本とロシアの文化交流に関する実証的研究』25～64頁、さいたま：埼玉大学教養学部（2007）
- 沢田和彦編『ポーランドの民族学者プロニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』（埼玉大学教養学部リベラルアーツ叢書5）、さいたま：埼玉大学教養学部・文化科学研究科（2013）
- シェロシエフスキ、井上紘一訳「毛深い人たちの間で」井上紘一編『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事——白老における記念碑の除幕に寄せて』77～108頁、北海道ポーランド文化協会、北大スラブ研究センター（2013）『井上2018再録』
- バチエラー、ジョン、「珍客来る」『ジョン、バチラー自叙傳 我が記憶をたどりて』288～290頁、東京：文録社（1928）

- ピウスツキ（露國ビルストスキ氏寄稿「上田將譯」）「樺太アイヌの状態」（上・下）『世界』26：57～66、27：42～49、東京：京華日報社（1906）
- ピウスツキ、二葉亭四迷宛書簡十五通（安井亮平翻刻・邦訳）『二葉亭四迷全集』別巻、14～15頁、筑摩書房（1993）
- ピウスツキ、井上絃一訳「サハリン・ギリヤークの困窮と欲求」（原典一八九八年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「復命報告（1～5）」（原典一九〇三年十月～一九〇五年十一月に擲筆）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「アイヌの習俗整備と統治に関する規程草稿」（原典二〇〇〇年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「サハリン島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」（原典一九〇七年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「樺太アイヌの経済生活の概況」（原典一九〇七年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、鳥居龍藏譯「樺太に於ける先住民」（原典一九〇九年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、和田完 訳「樺太アイヌのシャーマニズム」（原典一九〇九年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「樺太島の原住民における分娩・妊娠・流産・双子・畸形・不妊・多産」（原典一九一〇年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「アイヌ」（原典一九一〇年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「ギリヤークとアイヌにおけるハンセン病」（原典一九一三年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「樺太島アイヌの熊祭りにて」（原典一九一五年刊）「井上2018」所収
- ピウスツキ、井上絃一訳「樺太島のオロッコへの一九〇四年の旅より」（原典一九八九年刊）「井上2018」所収

（欧文）

- “Bronislaw Pilsudski Chronicle: Part 1: 1866–1905.” K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronislaw Pilsudski*, vol. 1, pp. 445–490, Saitama (2010)
- “Bronislaw Pilsudski Chronicle: Part 2: 1905–1984.” K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronislaw Pilsudski*, vol. 2, pp. 379–423, Saitama (2010)
- Inoue, K. (ed.), *B. Pilsudski in the Russian Far East: From the State Historical Archive of Vladivostok (Pilsudskiana de Sapporo no. 2)*, Sapporo: Slavic Research Center of Hokkaido University (2002)
- Inoue, K., “Bronislaw Pilsudski’s Letters to Franz Boas,” *Pilsudskiana de Sapporo*, №1: 115–131, Sapporo: Slavic Research Center, Hokkaido University (1999)
- Inoue, K., “Franz Boas and an unfinished Jesup on Sakhalin Island: Shedding New Light on Berthold Laufer and Bronislaw Pilsudski,” L. Kendall & I. Krupnik

- (eds.), *Conquering Cultures Then and Now: Celebrating Fritz Bae and the Jaspur North Pacific Expedition*, pp. 135-163, Washington D.C.: Arctic Studies Center, National Museum of Natural History, Smithsonian Institution (2003)
- Inoue, K., “Bronisław Piłsudski’s Endeavours on Ainu Education and Self-government,” K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 1, pp. 337–366, Saitama (2010)
- Inoue, K., “The Ainu Expedition to Hokkaido in 1903,” K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 3–37, Saitama (2010)
- Jędrzejewicz, W., *Kronika życia Józefa Piłsudskiego 1967-1935* (Tom drugi 1921-1935), Londyn: Polska Fundacja Kulturalna (1977)
- Kowalski, W., “The European Calendarium (Bronisław Ginet-Piłsudski in Europe 1906–1918),” *Linguistic and Oriental Studies from Poznań*, 2: 7-19, Poznań (1995); also in: K. Sawada & K. Inoue (eds.), *A Critical Biography of Bronisław Piłsudski*, vol. 2, pp. 129–150, Saitama (2010)
- Датышев, В. М., “Хроника командировки Бронислава Пилсудского на о. Сахалин в 1902-1905 гг.,” *Вестник Сахалинского музея* № 3: 403-406, Южно-Сахалинск (1996)
- Датышев, В. М., *Сахалинская жизнь Бронислава Пилсудского: Прологические к биографии* (Сахалинская и Курильская историческая библиотека), Южно-Сахалинск: Сахалинское книжное издательство (2008)
- Датышев, В. М. и Г. И. Дуварец, М. М. Прокофьев, *Бронислав Пилсудский и Лев Штернберг / Письма и документы (конец XIX — начало XX вв)* (Сахалинская и Курильская историческая библиотека), Южно-Сахалинск: ГУП «Сахалинская областная типография» (2011)
- Staszel, Jan, “Z nieznanych listów Bronisława Piłsudskiego do Marii Żatnowskiej z 1907 roku,” *Kwartnik Biblioteki Naukowej PAN i PAN w Krakowie*, Rok XLVIII: 343-410, Kraków (2003)